

県営有料駐車場がオープンしました

最近、モータリゼーションの発達に伴ない、熊本市中心部に集中する車両は増大する一方ですが、この車両を収容する駐車場が少ないために、市中心部の交通事情はますます混雑を極めていっています。この状況を緩和し、道路交通の円滑化、公衆の利便、都市機能の維持、増進を目的として、県ではこのたび水道町福祉会館裏の旧熊本県税務講習所跡地に県営有料駐車場を建設しまして本年三月一日から県民皆さんのご利用に供しています。

県営有料駐車場の施設の概要・利用時間及び料金等は次のとおりです。

一、施設の概要

- 名称 熊本県営有料駐車場
- 所在地 熊本市安政町三番九号(熊本県福祉会館裏国道三号線沿い)
- 建物構造 鉄骨造六階七層
- 延面積 八、五二三平方メートル(二、五七八坪)
- 収容台数 三三三台
- 駐車方式 自走式
- 管制装置 駐車券発行機・ゲート・在庫感知機・料金計算機・中央管制盤・総合満車表示灯
- 道路電光表示板・道路渋滞感知機
- 昇降設備 人用エレベーター六人乗り一基及び階段
- 消火設備 固定式泡消火設備を各階に

設置 自家発電 端末機用発電装置一式

設備 二、営業の概要

営業時間 年中無休・二十四時間営業(車両の出入取扱時間は午前八時から午後十二時まで)

駐車でき 車両の長さ五メートル・高る車両 さ二メートル以下の車両

料金 普通料金

車種	時間	基本料金	割増料金	深夜料金
普通自動車	三〇〇円	五〇円	三五〇円	

時間 基本料金割増料金(深夜料金) 普通自動車三〇〇円 五〇円(毎三十分) 八時から午前(八時前まで)

定期料金(一ヶ月)

種別	項目	時間	料金	摘要
日間	昼間	午前八時から午後九時まで	二〇〇〇円	屋間定期は日曜日及び祝祭日は利用できません
		午後六時から翌日の午前九時まで	一〇〇〇円	
夜間			一〇〇〇円	



自然を大切に

熊本県は、自然に恵まれたところですが、阿蘇の大自然は、すばらしいものです。天草の島々は、見る人を魅了してやみません。

しかし、その足もとにごみやあきかんが散乱していたらどうでしょう。全国にも比類のないこの自然の景観は、いっぺんに消しとんでしまうでしょう。

近年、人の集まる場所は、心ない行楽やドライブによるごみ、あきかん等の投げ捨てにより、美しい環境が汚染されています。これまで、県では、郷土の清掃浄化対策として「ごみの持ち帰り運動」をよびかけてきました。自分で持つて来たものは、自分で持ち帰れば、何も問題は起きないのですが、実行となると難しいようです。

数年前に、あき缶処理対策協会が関東地方を対象に「なぜあき缶が散らされるのでしょうか」というアンケートを行った結果、大半が「観光客などのマナーの悪さ、公德心の欠如」と答えています。自分の捨てたあきかんが、どれほど自然環境を、ひいては人の心を汚染していくのか。一人一人が自分の問題として真剣にとらえてもらいたいものです。

「人間の情操は、自然の中から育てられる」といわれます。特に子供にとっては、自然環境の及ぼす影響は大きいと思います。多くの人が子供のころ野山を走り、水に遊んだ思い出をお持ちではないでしょうか。高度経済成長時代、使い捨て時代といわれ、生活様式も環境もずいぶん変わってきましたが、人の自然を求める心は決して変わるものではありません。

バス停のタバコの吸いながら、行楽地のあきかんやごみの散乱——これは一日も早くなくしたいものです。お互いが人への思いやり、自然への思いやりの心を持つことが大切ではないでしょうか。

民話



古江大神宮様 天草郡河浦町 赤星 克巳

およそ二百五十年前から、河浦町古江の古江岳(標高三二四尺)につたわる話である。

この古江岳の山おくて、ある日爺さんが木を切っていた。日ぐれになったので帰ろうと、ふと岩の上を見ると、神様を祀る金の御幣がさん然と輝いている。爺さんは、喜んで家へ持ち帰り、ばあさんに話し、床の間に祀ることにした。ところが、翌朝になって床の間を見ると、金の御幣がない。爺さんは、盗まれたかと思ひ、あきらめてまた、山へ木を切りに出かけた。きのうの岩の上を見てびっくり、盗まれたものとはかり思っていた金の御幣が、朝日を浴び光っているではないか。

翌朝になると、また姿、形もない。すぐ山に登って岩の上を見ると、やっぱり岩の上に輝いていた。爺さんは、金の御幣をそのままにして山をくだり、ばあさんや村の人たちにこの話をし、どうしたらいいかみんなの知恵を出しあってみてもらった。その結果、金の御幣は、古江岳の頂上に「やしろ」を造り、祀ることになった。古江の村人たちが総出で山に登り、金の御幣が輝いていた岩の近くに、地びらきをして、石を集め、木を切り、やしろを築いて中に祀り、その名を「古江大神宮様」と名づけた。

この話を伝え聞いたとなり村のよめが夫の道楽に困まりはて「古江大神宮様」のお力をおかりしようと、願をかけ、はだして参詣をはじめた。七日目になった夫は、あとをつけてみると、妻は、一心になつて「古江大神宮様」に参詣していた。道楽者の夫は、妻のこの熱心さにつたれ、心を入れ変え、以来まじめに働くようになったという。

この話が次から次へと伝わり、医者から見はなされた難病の人たちさえ、参詣すると病氣もなおる御利益があらわれたという。その後ますます評判になり、遠くは長崎、鹿児島から参詣する人が絶えなかつたこの大神宮は、出雲大神宮の分身ではないだろうかとも言われている。

